

古典派経済学とポランニー ——スミス受容と自然主義に関して——

笠井 高人*

(2018年10月23日 受理)

Classical Economics and Karl Polanyi: On Comprehension of Adam Smith and Naturalism

KASAI Takato

Abstract

This study investigates Karl Polanyi's critique on classical economics and his comprehension of Adam Smith, with a focus on the concept of naturalism as conceived by Josef Townsend. This analysis will clarify the features of both classical economics and Polanyi's idea. On the one hand, Polanyi evaluated Smith's cognition of the relation between society and the economy; on the other hand, he did not recognize the propensity of free exchange and division of labour were denied. However, the Polanyi's evaluation of Smith was established in spite of lack of his sympathy in TMS.

The significance of "nature" was amended in economics. Smith insists that humans differed from animals due to the propensity of exchange as human nature. Classical economics equalized humanity with animals by applying the logic of nature to humanity as an insertion of naturalism. Polanyi refocused on external surroundings as a default condition for thought on economy and society.

Therefore, the difference among Smith, classical economics, and Polanyi was the origin of the idea of nature. Then, Smith shares with Polanyi the idea of humanity as a social existence, and Polanyi critiques the logic of nature in classical economics.

Keywords: Adam Smith, social existence, classical economics, humanity, Karl Polanyi, naturalism

はじめに

カール・ポランニー (Karl Polanyi, 1886-1964) は主著『大転換』(*The Great Transformation*, 1944)において、自由主義的経済学 (liberal economics) の論理が20世紀の2度の大战をもたらし、人類がこれまで積み上げてきた近代文明を崩壊させたことを論じた。経済学の合理性が社会を席卷したために、本来的には社会に従属すべき経済が、逆に社会に従属させている (経済が社会を埋め込んでい

* 鹿児島大学 教育学部 特任講師

る)ことを大戦の原因として知覚した。彼の視座よれば、人間の生を充足させるはずの経済活動が逆に人間を貧困や飢餓に直面させ、繁栄を目指して発展を志向してきた人類が結果として文明の危機を自ら招いたのである。

そのため、ポランニーは社会との調和を生まない経済学の論理的矛盾や資本主義体制に対する批判を展開し、その際にマルサスやリカードゥといったいわゆる古典派経済学の理論的支柱を作った人物を主に取り上げる。二人の功績によって経済学が社会から独立した科学となることで、本来的には経済と共に考えるべき側面がその分析視角から除去されていったと主張し、それらの結果として生まれた価格決定メカニズムの自律性という教義を批判する。自由な個人が参加して価格と数量とを自律的に決定する場、つまり経済学が主たる分析対象にする市場は、ポランニーにとっては虚構でしかなく、自己調整的市場 (self-regulating market) という名を付して、その非現実性を指摘した。

経済学の現状を批判することであるべき社会像を示そうとしたポランニーにとって、その理論体系はもちろん修正されるべき存在であった。古典派経済学の理論モデルを根本的に改変して、社会と調和できる理論を模索した。社会と経済に対する認識の改善を求めた経済学批判の要諦は、人間の主観的行動や社会的結びつきそして倫理的・道徳的側面を捨象して、客観的で精密な分析を進めた発展過程にあるといえよう。彼の云うように経済学が発展の道筋を違えたのであれば、そもそもポランニーにとっての「正しい」経済学とはいったいどのような学問であったのだろうか。

そこで本稿ではポランニーの経済学に対する理解を明らかにし、古典派経済学及びポランニー双方の理論的特性を議論する。とくに、ポランニーが批判することによって真に乗り越えなかった経済学の課題を鮮明にするため、彼の古典派経済学理解なかでもスミスへの評価を探求する。ポランニーは高等教育機関等で経済学を体系的には学んでいないため、当時の議論にどれほどキャッチアップできていたかは定かではないし、また彼が経済学をやや偏向して理解していたと予想される。ポランニーは、スミスに対しては時代の制約をうけつつも経済と社会との関係をいみじくも正しく把握したとして、必ずしも否定的なものだけでない評価を与えた一方で、自由主義的経済学の礎を形成した張本人としてマルサスとリカードゥを手厳しく批判した。このように、彼は経済学の成立そのものを問題視したのではない。そのため、古典派の課題と共にポランニーのスミス理解を検討することで、ポランニーが目指した経済学体系の一端が明らかとなろう。

本稿の構成は以下のとおりである。第1章ではポランニーによるスミス理解を検討し、ポランニーが社会と経済との関係を正しく把握した思想家としてスミスを評価する一方で、経済活動のもとになる交換性向や分業に関しては異なった理解を示していることを明らかにする。第2章では経済学における自然主義の導入を軸にしてリカードゥ・マルサスに対する批判を検討する。第3章では、スミスとポランニーの議論を比較する。国際交易の起源である遠隔地交易関する議論から、人間の外部環境である自然に対する理解の違いを鮮明化する。さらに社会的存在としての人間像つまり人間と社会そして経済との関係に関する認識を比較し、両者が社会認識を共有していたことを示す。最後に議論をまとめる。

1 スミス理解

社会と経済

これまでの研究において、ポランニーとスミスとの関係が議論の中心となったことは少ない。なぜなら、2人の活躍した時代は200年以上離れている¹、何よりもポランニーがスミスをはじめとする古典派経済学を肯定的には評価せず、その影響は否定的なものと考えられているため、ポランニーの思想を探る際には主としてマルクスやオットー・バウアー、オスカー・ヤシなどからの社会主義思想の影響に着目して議論が展開されてきた²。また、ポランニーをスミス理論のオルタナティブとして前提されていた先行研究（リー、2014; Almodover and Brandão, 2001; Özveren, 2001）にも起因する。しかし、本稿ではまずはポランニーの経済学理解を解明するため、スミスを参照基準とする。

では、ポランニーのスミス理解をみてみよう。ポランニーのスミス理解はおもに『大転換』第10章「政治経済学と社会の発見」や「社会における経済の位置」（1957）という論考に示されている。ポランニーは「〔スミスが〕物質的富を一つの独立した研究領域として扱ったのであり、また偉大な現実感覚を持って研究を行ったことによって、彼〔スミス〕は新しい科学、すなわち経済学（economics）の創始者となった」（Polanyi, 1944, p.116, 邦訳 201 頁）とスミスを評価し、『国富論』を偉大な著作（great work）とも表現した。ポランニーがスミスを経済学の創始者としたのは、「賃金と地代とを『価格』という群れの中の一括することを可能にし」、それらが競争的市場に由来する限りにおいて、相互に依存することを認識したためである（Polanyi, 1977, pp. 7-8, 邦訳 39-40 頁）。³また、スミスの認識の特徴として富と国家が独立して存在していないこと——つまり①国家の進歩・停滞・衰退という趨勢が国富を決定すること、②安全保障の観点から生じるバランス・オブ・パワーの必要性が富の多寡を左右する国家の課題とされていること、そして③国家がどの産業を優遇するのかを決定すること——が挙げられている。富の増大が国家戦略として取り扱われ、政治的枠組みのなかで議論される問題として捉えていたことと、静態的なものとして国家を捉えず、常態的に変化する存在であると措定して、その変化の方向と国富とを関連付けて論じていることにスミスの特徴をみた。このように変化する政治的枠組みを一旦所与とし、そのなかで経済領域の課題を考えて改善策を講ずることは、政治領域を含む社会が経済を従属させる世界こそが平常であるというポランニーの主張と対立しない。⁴つまり社会ははまだ経済を埋め込んでいた。

さらにポランニーは、スミスの経済学が社会的な法則を含意しないことを指摘し、これを後のマルサス

¹つまり現代に生きる我々とポランニーよりもスミスとポランニーの方が時代を異にしている。

²ポランニーの社会思想の形成過程については若森（2011）や Dale（2010, 2017）などに詳しい。

³今日、価格として一括りにまとめられているものが、本来は質的に別々のものであり、それらに対応する貨幣とその役割も多様であったというポランニーの議論については笠井（2019）を参照せよ。

⁴国家政策としての国富の拡大をスミスが志向したからといって、大戦を招いた帝国主義的政策の経済的要因を彼に帰すことはしない。ポランニーもはっきりと「反帝国主義的な考えの創始者はA・スミスである」（Polanyi, 1944, p. 221, 邦訳 385 頁）と示している通り、経済学の発生、自由主義との結合、帝国主義的發展を区別して論じている。ポランニーによれば、帝国主義的發展は自由主義的経済学という素地の上に、輸送費の低下によって穀物が世界的規模で容易に移動できるようになったことで、各国が自らの市場を拡大する動きを取ったことに由来するという。つまりそこでは家政ではなく、市場という制度的パターンに支えられながら拡大していく交換経済が国家によって志向されたのである。なるほどこの様に考えると、国家の家政・オイコスとしての経済が広義のグローバリズムと結びつくことによって帝国主義の拡大傾向を特徴付けることができよう。また、輸送費などの取引費用の低下によって市場が地球規模で一体化されることこそがグローバリズムの要因であり、そのことが市場の恩恵にあずかれない者を生むという視角は Rodrik（2011）など今日のグローバリズムに批判的な論者と共通する。

やりカードゥらとの違いとして示す。「彼〔スミス〕の著作では、資本家の経済的利害が社会に対する法則を規定するとは述べられていないし、また資本家が、独立した一つの実体としての経済領域を支配する神の摂理の世俗的代弁者であるともされていない。彼にとって、経済領域は、善と悪との基準を与える独自の法則にはいまだ従属していないのである」(Polanyi, 1944, pp. 116-117, 邦訳 202 頁)。このように、規範的分析によって社会を一定方向へ進めようとする趨勢がスミスの経済学にはまだ見られない。もちろん、スミスも事実を解明して政策的なインプリケーションを引き出すけれども、その論理的帰結はあらゆる社会に適用できるものではなく、その時々状況に依存して析出される可変的なものである。このようにスミスは経済の普遍性よりも市場の独自性に向かった議論を展開し、さらにスミスが「社会における経済の領域を分離して認識する立場には反対であった」とポランニーは認識している (Polanyi, 1977, p. 8, 邦訳 40-41 頁)。だからこそ、その時々国家の立ち振る舞いで富が如何様にもかかわる。

また、社会と経済のつながりは国家と市場だけではなく、社会生活を営む人間の全体性を射程に入れていた。ポランニーは「経済生活は国民生活の一側面にすぎない」とスミスが認識しており、「〔スミスの〕アプローチは依然として制度的、歴史的、社会的」(Polanyi, 1957, p. 128, 邦訳 540 頁)なものとして捉えられる。このように、ポランニーは社会と経済の関係に着目して、スミスを後の経済学者たちとは一線を画した思想家であったと考えた。

交換性向の否定

ポランニーは、社会と経済の関係を正しく措定したスミスが経済学の成立に欠かせない人物であることを認め、社会の富を分析する視角を称えたいうえで、交換性向という人間本性に対する認識が誤りであることを示す。スミスが示した人間の持つ交換性向は近代的視角の賜物であり、人類社会の歴史に鑑みるとそれを確認できることの方が稀であるとした。そのことをポランニーは歴史的・人類学的・民族学的分析を用いて明らかにする。スミスの交換性向を否定するその根拠には「未開人であろうと利益のあがる仕事を好む」(Polanyi, 1944, p. 46, 邦訳 79 頁)という 19 世紀的偏見を正す目的がある。そのためスミスが重視した「人間の取引・交易・交換性向といわれるようなものの根拠はまったくもってあやふやなものであった」(Polanyi, 1944, p. 45, 邦訳 78 頁)と看破する。利益によって経済活動の動機を与えられる人間像を修正するため、未開・古代社会における互酬や再分配といった経済の在り方を示した。利益の誘因によって交換や取引を好んで行う人間は人類史においてはむしろ稀であって、本来的には社会的紐帯こそが人間活動の原理として働くのである。そこで示されているのは社会的存在としての人間の不変性であり、ポランニーは時代を異にしても保たれるそれを人間本性として捉えた。「アダム・スミスが自らの著作で未開人を描写する際にあれほど自信をもってよりどころとした取引性向は、人間が経済活動に従事するときの普遍的な特質であるところか、きわめてまれな性向なのであった。」(Polanyi, 1944, p. 258, 邦訳 453 頁)「アダム・スミスは原始人の生息の場所にビジネスの方法を導入し、彼の有名な取引、交易、交換性向を、パラダイスの裏庭にまで投射した。」(Polanyi, 1977, p. 8, 邦訳 41 頁)というように、交換する未開人という考えは誤りである。

また交換性向が人間本性としてふさわしくないことにくわえ、市場という統合形態と交換という制度的

パターン、そして個人的行為の区別をポランニーは強調する。すなわち、スミスの議論では、個人的行為が交換という統合形態によって、市場という制度的パターンを形成することになる。しかし「個人的行為や態度が単純に統合形態を支える制度上の構造を作り上げるようになる、ということは真実ではない」(Polanyi, 1977, p. 35, 邦訳 91 頁) ののである。事実はむしろ逆であって、市場という制度的パターンの助けを借りて交換が成立するのであり、交換は市場という制度的パターンの助けがなければこれほど広範な経済活動にはなりえない。このように思考法に関して、ポランニーはスミスと基本的立場を異にする。

分業論：自然と人間

ポランニーによれば、社会と経済の関係を正しく把握したスミスの生んだ経済学が、社会と調和できなくなる過ちの第一歩を踏み出したのは、スミスが自然的環境よりも人間の能力に経済・社会発展の可能性を見出そうとしたからだという。人間は、モデル分析のように紙とペンに基づいて机上で動くのではなく、また個々が完全に独立した存在でもないと同様に、人間は生まれ落ちた人的・自然的環境に依存して生存している。生産を左右する与えられた自然 (nature) の条件に関して、スミスが地理的環境などの物理的なものを排除し、労働者の熟練度と人口における生産的労働者の比率という人的要因に絞ったことにポランニーは着目する。

スミスにとっては人間精神に体现された理性こそが自然である。スミスのこのような考えは、人間が生存するための経済活動の基礎として自然的要素を重視したポランニーとは社会への理解を異にしている。スミスがこのような態度をとった根拠がフィジオクラートの農業生産へ偏向にある。ポランニーが見たスミスの経済学 (political economy) とは、「農業への偏好によって物理的自然を人間にとって自然なものとし」自然を賛美したフィジオクラートとは違って、大前提として「人間科学でなければならず、『自然』にとつてではなく、人間にとって本来的なものを取り扱うべき」(Polanyi, 1944, p. 117, 邦訳 203 頁) だった。だからこそ自然的環境よりも人間的要素に富の原因を求めたのである。

また、ポランニーは経済人の仮定を受け入れることはしないため、交換性向に基づく分業の発生についてスミスの主張を否定する。しかしながら、分業そのものが社会に存在しないとするのではなく、むしろスミスの想定よりも以前からそれが自然に発生するという。人間がその本性として交換性向を持つがゆえに分業が発達し、それが社会の発展を実現させたというスミスの議論に対し、ポランニーは分業の根拠は人間本性としての交換性向ではなく、生まれ落ちた環境の差によるものであるとする。つまり「社会の起源と同様に古い現象である分業は、男女の違い、地理的条件、そして個人の持つ資質という諸事実に固有の差異に由来するもの」(Polanyi, 1944, p. 46, 邦訳 78 頁) である。

分業が生産効率を高め、産業発展をもたらした歴史的事実をポランニーは否定しないが、その根拠は人間本性に求めるのではなく、所与の自然環境に求めた。人間が生まれる自然的環境は多様である。緯度や周囲の地理的条件によって気候は左右されるであろうし、そこで得られる農作物もそれらの影響を受ける。自然環境による影響は近代以降よりもむしろ科学技術等が未熟な未開・古代社会の方が大きい。また同様に人間個人の能力も千差万別である。⁵そのような人間の能力が及ばない領域として自然を捉え、

⁵ スミスも『国富論』の中で分業論を論じるように、個々人の天賦の能力の差について言及しているが、それは一般に考え

その違いが多様な商品を生み出す分業を導くとポランニーは考える。富の源泉が自然の土地からのみ生まれるとしたフィジオクラートの議論をスミスが乗り越えようとするあまり、人間と自然環境との関係を見落とすことになったとポランニーは看取する。物理的自然よりも人間的要因を重視するからこそ、人間の操作できない要素への考察は弱くならざるを得なかったのである。つまり、天然資源への考慮を除去し、環境に影響される人間という視点の欠如がポランニーのスミス批判である。もちろん、このことはスミスだけでなくフィジオクラートにも共通して当てはまる。ポランニーに言わせればフィジオクラートの自然とは「販売価格が費用に対して示すことのできる不平等」(Polanyi, 1977, p. 8, 邦訳 41 頁)でしかなく、それを「自然の秩序」と呼んでいるに過ぎない。人間と環境との関係性はポランニーが経済学の欠点として認識し、その視角を求めた要素の一つである。彼にとっての自然とは多様性を意味し、その多様性の中で人間が適応していく姿がまさに自然の成り行きなのである。⁶

ポランニーのスミスに対する叙述を追う限り、価格調整メカニズムや裁定取引といった市場が自律的に最適な状態を実現するということに対する言及はない。市場の機能を利用しつつもそれが有効需要という人間の倫理的側面を反映した制限があったからこそ是認したのだと考えられる。ポランニーは市場そのものを厭ったわけではなく、市場を制限や制約なく使用する態度に否定的であった。その証拠に古代ギリシアにおいて都市に制約されながら公正価格が実現する市場を活用する経済の在り方について肯定的に取り扱っている(笠井, 2016)。あくまで市場が社会において付随的なものであることを重視した、つまり「市場価格だけによって統制される」(Polanyi, 1944, p. 45, 邦訳 77 頁)ものとしての市場経済を否定したのである。

同感論の欠如

このように経済学に視座の変更を迫るポランニーのスミス理解は、『国富論』しか考察対象としていないという現代から見れば大きな欠点が存在する。彼の議論には当時すでに公刊されていた『道徳感情論』の内容への言及はなく、その議論を知らない可能性がある。スミスの道徳論に関してポランニーは以下のようにいう。

「彼〔スミス〕の見解によれば、道徳律や政治的義務の源泉になるような経済領域が社会の中に存在することを示すものなどはいささかも見られない。肉屋の利己心が究極的には我々に食事を提供してくれるように、利己心というものは、元来われわれを促して他人にも恩恵を与えるようなことを行わせるものにすぎない。森羅万象を統べる法が人間の運命と調和するものであるならば、経済という領域を支配する法もそうでないはずはない。このようなおおらかな楽観主義がスミスの思考の隅々にまで行き渡っていた。見えざる手の利己心の名のもとに共食いの儀式を我々に強制しようとするなどということはない。人間の尊厳とは道徳的人間としての尊厳であり、そうしたものとして、人間は家族・国家および『大人

られているよりは実際には小さい。たとえ大きな差に感ずるようでも、それは天賦の差ではなく分業の結果であるという。(Smith, 1775, ch.2)

⁶実際、ポランニーは人間が環境によってその性質を大きく変えるものであると認識していた。

類社会 (the great Society of mankind)』という市民的秩序の一員なのだ。……競争や利潤より理性や人間性が優先されねばならない。」(Polanyi, 1944, p.117, 邦訳 202 頁)

ポランニーの見解では、人々が互いに持つ利己心によって社会が形成されることに言及するのみであり、スミスが『道徳感情論』で展開した共感 (sympathy) に基づくフェアプレイの社会を描いていたことが欠如しており、スミスの道徳哲学者としての側面が考慮されていない。現代のスミス研究が示す通り、スミスは正義や仁愛・慈恵を経済社会の基礎においていた (野原, 2013)。にもかかわらず、ポランニーは人間の道徳的側面を経済学に求めるという倒錯を起こしている。もちろん内面化した公平な観察者の議論をポランニーが知ったとしてもスミス評価が変わるかどうかは不明である。しかしながら、楽観主義であるとの見方や人間の利己心が社会と調和しないということは示さなかつただろう。一方で、社会と経済の関係を認識した思想家としての評価はより強固なものになっていたはずである。

そのような倒錯はポランニーがマルサス・リカードゥらから遡及してスミスを把握した結果である⁷。労働観についてもポランニーはスミスが見た労働の人間性のうち量的に把握可能な形式的側面にのみ焦点を絞っており、労働の苦役以外の多様な側面を看過している (Watson, 2014)。倫理と経済に関する思想家としてスミスを受容できなかったことがポランニーの限界といえよう⁸。

2 古典派経済学批判

ポランニーが認識したスミスの限界は貧困問題を積極的に議論の中心に据えられなかったことである。この限界こそが、ポランニーがスミスを 18 世紀の人物と評する由縁なのである。つまりポランニーにとって 19 世紀とは、商業社会の発展と時を同じくして発生した貧困をいかに克服するかを社会的な議論の主題とする時代であった。⁹もちろん、スミスの時代にも貧困は存在したが、産業革命に伴う都市化とその不可逆性、そして都市での労働の不安定性によって、労働者と貧困の増大が憂慮するほどの社会問題に

⁷リカードゥ批判の立場からスミスを眺めて、誤りを正す姿勢は労働価値説にも確認できる。スミスはロックから労働価値説を受け継いだ、それを普遍化しなかったために陥穽を避けられたとポランニーは評価する。しかし、その内容はあまり判然としない。「アダム・スミスは価値の源泉は労働であるというロックの議論の誤った出発点を受け入れたけれども、持ち前の現実主義的な感覚によってこの議論を徹底化するという陥穽を避けることができた。…… [スミスは] 大多数の人々が貧乏で悲惨な状況にあるような社会はけっして繁栄しないと主張したのである。しかしながら今日のわれわれに自明の理と見えるものが、スミスの時代には奇説であった。スミス自身の見解は、次のようなものであった。すなわち彼は、豊かさが普遍的になればそれは大衆にも浸透せざるをえず、社会がどんどんと裕福になっていくのに人々がますます貧しくなるということはいかなる理由もなくありえない、と考えたのである。」(Polanyi, 1944, p. 129, 邦訳 218-219 頁) このような指摘をしつつも、それに代わる価値論をポランニーは主張できなかった。

⁸ポランニーの倫理的側面を強調して評価する研究については Holmes (2012) および Rogan (2017) を参照せよ。

⁹本稿の射程を超えるが、「19 世紀文明」の崩壊を主題とした『大転換』をもとに、いかにして次の社会 (20 世紀文明や 21 世紀文明) を構築するのか (つまりポランニーの視座から現代に対するインプリケーションを如何に引きだすのか) という問題を考えるのであれば、ポランニーが認識した時代区分を議論することは、その中心命題として据えられるべきであろう。なぜなら、19 世紀文明という資本制社会の超克こそが彼の関心事であり、時代区分を語ることで、今日われわれが目すべき問題の核心は何であるのかということの規定できるためである。そのような視点から資本主義のマネジメントという可能性を挑戦的に探った研究に重本 (2018) がある。

¹⁰ちなみにポランニーは、工業労働者が分業によって各々の単純な作業に従事することで多様な作業を必要とする農夫よりも知性や能力が劣ってしまうために、雇用情勢の変化によって職を失う可能性が高いことをスミスと認識を共有していたと

なっていないなかったとポランニーは認識した。¹⁰ 他方、マルサスとリカードゥを19世紀の人物とする。それはまさに彼らが貧困問題を取り扱ったからである。

ポランニーが、急速に増大する貧困にアプローチできなかつたという限界を持つスミスの『国富論』を称揚した一方で、マルサスとリカードゥを問題視したのはいったい何故なのか。それは、二人が賃金の鉄法則 (iron law of wage) を主張したためである。ポランニーはスミスとマルサスを繋ぐ要素として、タウンゼント『救貧法論』における山羊と犬の定理すなわち無人島での両者の繁殖の均衡を挙げる。山羊が生息する無人島に犬を離せば、山羊の頭数は減り、犬の数は繁殖能力に依存して増加する。しかし犬も無尽蔵に増えることはなく、食糧である山羊の数によって規定される。¹¹ このことからタウンゼントは、生き物の数は食糧に依存することを主張し、それを救貧法改革にも適用しようと試みた。¹² ポランニーは、このようなタウンゼントの思想があったからこそ、マルサスの人口法則が近代社会に大きな影響を与えたことを重視する。

タウンゼントの思想は制約のない自由な環境では人間が動物と同じであることを意味した。「政治的秩序の存在しない社会のための所与の基盤として、人間の生物学的本性が登場した。かくして、経済学者たちはほどなくしてアダム・スミスの思想の人間主義的基盤を放棄し、タウンゼントの提唱した基盤を取り入れることになったのである。……経済的社会が、政治的国家とは別個のものとして登場したのである」(Polanyi, 1944, p.120, 邦訳 207 頁)。取引性向という人間本性以上に強力な野性性つまり食糧と生存数との関係という一種の自然主義が、スミスの経済学から政治領域を捨象して経済を独立した科学の対象とするきっかけを作ったのである。しかし、ポランニーはタウンゼントを「労働市場の自律性を理解しただけであった」(Polanyi, 1957, p. 129, 邦訳 541 頁) と評し、それが経済学発展に寄与しつつも、タウンゼントを批判の中心的存在に据えることはしなかった。それはタウンゼントが社会を占める独自の法則を見つけるには至らなかつたためである。

ポランニーは、ゴドウィンとマルサスの書簡によって古典派経済学が始まったとするため、その術語にスミスを含めない (Polanyi, 1944, p. 127, 邦訳 215 頁)。¹³ ポランニーの批判は、スピーナムランド体制時の救貧法が、賃金の鉄法則という賃金生存費説と人口法則つまりリカードゥの理論的柱を支えるヴィジョンを作ったことに対してなされた (Polanyi, 1944, p. 128, 邦訳 217 頁)。本来ならば雇用主が支払うべき労働者への賃金を教区による救貧扶助に頼ったというスピーナムランド体制の効果をマルサスとリカードゥ

いうことを、「工場労働者を、最も貧しい農夫よりも知性の面で劣る人間—というのは、最も貧しい農夫はふつうどんな仕事にも自分を順応させることができる」(Polanyi, 1944, p. 97, 邦訳 162 頁) と表現して指摘している。また「土地から切り離された労働者が知的関心をまったくなくしてしまう」(Polanyi, 1944, p. 303, 邦訳 532 頁) ことを予想できていたスミスを評価し、労働者の人間的退廃が経済問題ではなく社会的破壊であるという認識をオーウェンとの共通項として見いだしている。オーウェンを高く評価したポランニーにとって、スミスは大きな限界を孕むものの、やはり好意的にとらえられるべき存在であることがわかる。

¹¹ この山羊と犬の逸話が事実と反するであろうことはポランニーによっても指摘されている。(Polanyi, 1944, Ch.10)

¹² タウンゼントのこの主張は人間という種の数食糧の多寡によって規制されることを示すが、貧民の問題を解明できていない。(東條, 2009)

¹³ この点に関して、ポランニーが用いる古典派経済学という術語の内容は著作間で一定でない。『大転換』においてはマルサスとリカードゥを指すと記されているが、「社会における経済的位置」ではタウンゼントをマルサス、リカードゥとを「最初の経済学的アプローチ」をとったグループとして区分けしている。なおスミスは「最初の社会的アプローチ」とった人物として別グループに入れられている。

が正確に把握できなかつたために、大量の労働者の低賃金や生活苦を真に改善する策として救貧法の改正を主張できなかつたという。スピーナムランド体制が持っていた人々の貧困を社会的なものとして取り扱うという機能を正しく捉えられていれば、古典派経済学の認識そのものが変更された。そのため「正統派〔古典派〕経済学 (orthodox economics) の基礎となっている自然主義的な要素は、基本的にスピーナムランド体制によって創出された状況の結果」(Polanyi, 1944, p. 129, 邦訳 218 頁) でしかなかったとポランニーは看破する。

ポランニーは、マルサスの思想が、タウンゼンドの労働の自律性の議論にくわえ、人間の飢えを永続化する要素として性を認識したことで、自然の摂理に伴って貧困を解決すべきという社会的趨勢を持ったことを問題視する。(Polanyi, 1957, p. 130, 邦訳 544 頁) さらにリカードゥに対しては、スミスが利己心という言葉で漠然と捉えたものから、社会的側面をはぎ取り、利得動機と利潤動機 (profit and gain) という経済的側面によって人間行動を説明しようとしたと評する。そのような動きは貧困が増加する当時の社会にあっては、労働者における飢餓の恐怖と資本家の利潤への期待として体现する。(Polanyi, 1957, pp. 131-132, 邦訳 544-545 頁) とりわけ前者が機能することで、飢餓が個人の問題となり、社会は経済に従属して埋め込まれることになる。なぜならそれは自然の摂理によって裏付けられた「事実」であったからである。古典派経済学は「独立で自律的な経済システムという現代的概念を確立した。この経済システムは経済的諸動機によって支配され、形式合理性 (すなわち経済化) という経済原理に服している」(Polanyi, 1957, p. 132, 邦訳 545 頁) のである。ポランニーにとっては、経済的諸動機によって支配された合理性はスピーナムランド体制の結果でしかないため、それを根拠とする経済理論を否定する。

ポランニーはリカードゥの理論には経済社会における自然主義的な要素とそれを相殺するほどの人間的な要素が共存しているとする。それは労働の原理である。リカードゥは人間が経済的価値を作るというスミスの労働価値説と、フィジオクラートの自然の理論を受け継ぎ、そして取引を等価交換の原理としてまとめた。経済社会における自然主義的な要素が競争的な自己調整的市場の形成に向かった。救貧法を廃止すること、つまりスピーナムランド体制に反対することはタウンゼンド、マルサス、バーク、ベンサム、そしてリカードゥの一致した見解であった。定住法の廃止によって移動の自由が与えられ、生存権を確保していた救貧法の廃止つまりスピーナムランド体制の終焉によって、自由な労働市場が形成された。しかしながら、その自由な労働市場は不完全なものでしかなかった。

また、スピーナムランド体制のために実質的には労働市場は存在しないにもかかわらず競争的市場経済を標榜した古典派経済学の意義を以下のように言う。第一に古典派経済学の理論が混乱に陥りながら形成されることになった。賃金基金説それ自身が曖昧であるにもかかわらず、そのうえに均整の取れた理論と絶対的な結論を引きだそうと試みたことが失敗の原因だったという。二つ目はこの時期に労働分野における温情主義と市場経済に同時に作用した結果、本来二つのシステムによって説明されるべきものを1つにまとめようとしたため、混乱以外を生み出せなかつたことである。第三に、市場経済を理解するうえで古典派経済学が出した解答が、人間存在に求められるのではなく、自然の権威によって根拠を与えら

¹⁴ 東條 (1995) はこれを「経済生物学」の可能性としている。

れたため広範に影響を及ぼしたことである。リカードの収穫逓減は現在で言えば植物学や農学の法則¹⁴であるし、マルサスの人口法則も人間の繁殖能力と土地の産出力との関係を論じたものであって、どちらも物理的・環境的な自然に着眼している。マルサスの人口増加法則は、人間が動物の一種¹⁵であるという前提のもとで、生殖力と植物の成長のバランスを示したものであり、それはタウンゼンドの山羊と犬の均衡を適用したにすぎない。そのため「経済的社会は人間法則にあらざる法則に支配された」(Polanyi, 1944, p. 131, 221 頁)とした。ポランニーは、ここに自然主義に支配される19世紀的人間世界が誕生したといい、これ以後、社会の人間世界への再統合が問題となる。つまり経済がそれ自身独立した分析対象となりつつも、その帰結が不条理なため、いかに社会と調和させるかが議論され続けるのである。

結局のところ経済学が自然主義を採用したことにポランニーの経済学批判の核心を確認できる。タウンゼンドの山羊と犬の定理は、自然界の動物であれば、食糧と捕食者によってその数が規定されることを意味する。人間の外部的世界つまり人間以外の生き物を自然と捉えて導出されたその規則性は、当然飢餓の論理へと連なる。マルサスは自然界におけるその法則を、動物の一種である人間に当てはめることで、人間も従うはずの自然のルールを見つけた。それは人間の外部世界に存在する規則であり、何もしなければ自然とそれに従う摂理である。自然の論理に自然と従うからこそ人口法則を自然と捉えることができた。ここで重要なのは、マルサスが人間を他の動物と同じものとして取り扱ったということである。経済学において自然という言葉は理想的な状態という規範的な意味を持つのである(喜治, 2012)。

スミスが見た交換性向は動物には備わっていないが人間なら自然と獲得する能力であったため、それを人間本性(human nature)としてとらえた。言い換えれば、スミスは、人間が他の動物と異なることを示すために「自ずから(naturally)」備わっているものを見据えたのである。一方で、マルサスは人間と動物との共通項を見つけるために自然(nature)を利用したように、自然と人間との関係が両者の間で倒置している。ポランニーはそのような倒置のきっかけを導いた思想家としてタウンゼンドを指定するのであった。リカードゥに関しても、上述したように自然の制約として土地の生産力を取り扱い、人間の内部に存する自然よりも人間の外部環境としての自然にフォーカスすることで、経済学から人間性を弱めていくこととなった。

付言すれば、リカードゥもマルサスも貧困者の救済に無関心であったわけでないことをポランニーもたしかに認めているけれども、そのような人間存在に対する温情的な関心が二人の「誤った理論」をさらに湾曲させてしまったという。とくにポランニーはマルサスの理論が自然主義を貫徹できないことを認識したにも拘らず、表面的にそれを装うことを企図したため否定的になった。人口と食糧生産との均衡が自然に要請される一方で、それを実現するには社会的な力が関与する必要があるという矛盾を指摘する(Polanyi, 1944, pp. 131-132, 邦訳 221-222 頁)。つまり、労働者の要求水準が高まれば、生存のための最低限の賃金水準も上昇するであろうことをマルサスが論じた。リカードゥにおいても、労働者が慰安と楽しみを得ることを知り、それを得るための努力をすることを正当化した。自然の「現実」を受け止め、社会による改善を望む態度、『大転換』の言葉を用いれば、社会の現実を受け入れて人間の自由を希求する態度は肯定できようが、そのやり方がポランニーにとっては受け入れ難かったのである。時間を経て物価が上昇する

¹⁵ このような見方を強調するのはダーウィン以後の思想家の特性といえるかもしれない。

ことや技術の発展・浸透により生存費が上昇し、それに伴って飢餓水準が上昇するのであれば、生存賃金の自然な上昇は容認できるけれども、労働者の窮状を改善するために、彼らに豊かな生活を求めさせることで生存賃金を上昇させるという政策提言はもはや理論に沿ったものとは言えないだろう。たしかに生きざりぎりの賃金水準を労働者が自ら習慣等を変化させることによって上昇させることができるというのは意味不明である。そのような経済学の隘路を見つけたにも拘らず、人間存在を無視して、自然に基づく論理を重視したことがポランニーの見た古典派経済学の限界である。¹⁶

このような古典派批判の後にポランニーが評価したのは、それまでの思想家とは一線を画し、労働市場の成立を拒んだオーウェンであった。彼は社会における動物主義的な考え、つまりダウンゼンドが示した自然主義的な発想を拒絶した。それは人間の個別化の防止を意味する。人間の社会的側面を捨象して人類を個別化することへの批判が、ポランニーが評価するオーウェンの功績である。だからこそ、個別化をもたらす自然主義を標榜しないスミスの社会認識を評価したのである。

このように見ればポランニーの経済学批判の要諦が、個人の問題として飢餓が取り扱われることで発生した貧困の超克であったことが鮮明となろう。貧困問題を解決しようとしたために、人類の自然的・動物的側面を重視することで、本来社会的存在であるはずの人間を個別化し、労働市場を形成したのが古典派経済学の問題であった。それは、時代の思想家が抱いた生存賃金をいかに改善するかという人間の温情が招いた理論的帰結であり、ポランニーにとっての陰鬱な科学の体現であったといえよう。だからこそ、労働市場が誕生する発端となった貧困問題を知覚できなかったスミスは、ポランニーにとって18世紀的思想家であり、批判の主たる標的とはならないのである。

3 ポランニーとスミス

遠隔地交易の起源

ここでスミスとポランニーの議論を比較しよう。¹⁷世界的な単一市場の成立に関して、それぞれ異なった交易の発達順序によって説明している。スミスは、人々が持つ個人の交換性向に基づいて地域的・局所的市場が形作られ、それと同時に分業が進展し、さらに商業の発達によって遠隔地交易や国際貿易が形成されることで地球大に統合された市場が登場したという (Smith, 1776)。いわゆる文明の4段階説によって、未開人の社会から商業段階に発展して、国際貿易が生まれるという。そこでは、たんなる交易と市場とを区別しないため¹⁸、個人間の取引から地域的交易および市場が生まれて工業が発達し、それがさらに拡大して商業的な国際交易を発生させるといった単線的な拡大が、統合された市場を形成したとする。このように個人間の取引市場と同様に国際貿易市場を規模の違いとして捉えている。

このような発展過程によって世界的な市場の形成を説明するスミスは、市場規模の拡大つまり商業の発

¹⁶ さらに自由主義の経済学がスミスの議論に依拠できてないともいう。「経済的自由主義者によれば、経済領域の支配者は社会に恩恵をもたらす傾向があるのに対して、政治の領域の支配者はそうではないという。しかしそのように考えるのは単純にすぎるだろう。実際、アダム・スミスはそう考えていなかったように思われる」(Polanyi, 1944, p. 173, 邦訳 300 頁)。

¹⁷ 本節の議論は主に笠井 (2016) をもとにしている。

¹⁸ 市場と分業を結び付けたスミスの功績が、逆に制度的な視点が欠如しているというポランニーの批判に合う (Polanyi, 1957, pp. 127-128, 邦訳 539 頁)。

展を議論するために、他の地域の市場を利用することも主張する。とりわけ大規模に物財の移動を行える水運輸送に着目して、地域間の発展の差および発展の普及を説く。つまり、地域間交易の必要性から大領輸送ができる水運業が発達し、それに伴って、港などから順に社会インフラが整備されるため、港湾・沿岸地域から内陸へと産業が進歩する。(Smith, 1776, ch.3) スミスのこのような議論は地理的にも港湾から内陸へと続く単線的な発展過程が看取できる。

一方でポランニーは、スミスのこのような単線的拡大によって形成される国際交易という考えを踏襲せず、市場の起源を逆に遠隔地交易にもとめる。それは先に見たように彼の云う人間の取引動機が古典派理論とまったく異なり、交換性向に基づかないためである。ポランニーの想定では、まず地理的分布の結果として物財の偏在によるたんなる交易があり、そこから市場が発生する。物財の偏在という自然的環境の初期値を前提に必要な物の獲得のための遠隔地交易を人間の市場取引の出発点としたのである。つまり市場の起源である遠隔地交易は、物財の分布・偏在といった経済の外部的要因によって発生したのであって、特定の地域でしか生産できない自然の多様性を加味したもの、言い換えれば、環境と人間との関係を考慮した議論となっている。

もちろん、スミスも特定の土壌や地域でしか生産できない商品について言及しているが、それは希少性によって供給量が制限され有効需要をみだせないために高価格が維持される原理を説明するのに用いられるだけである (Smith, 1776, ch7)。スミスにとっては市場で自然価格と市場価格が公正に一致することが関心事であり、その商品が特定の場所でなければ生産できないために市場に供給されないという発想は見当たらない。¹⁹

ポランニーの議論では、遠隔地交易と局所的な取引がともに生存に必要な有用物を得るために形成され、補完的に併存していたうえで、それらを繋げる局所的市場が生まれたという。彼は、局所的市場の形成に関して詳しいことはわからないとしつつも、それが貨幣仕様の一般化と商品の広範な市場性を前提にしている (Polanyi, 1944, p. 120, 邦訳 206 頁)。局所的市場の発生が他の交易に遅れるのである。このように、ポランニーはスミスとは異なって市場交換の発生についても自然的環境を重視する。

社会的存在としての人間

先に見た通り、ポランニーは、スミスの交換性向が近代的な思想の賜物であり、それを古代社会や未開人に適用することが誤りであると批判したが、その一方で、スミスが人間を市場において個々独立した存在ではなく、社会的な存在であるとしたことを評価した。この社会的存在としての人間という視角を用いれば、ポランニーのスミス理解はやや錯綜していることがわかる。

スミスの交換性向は、マルサスやリカードの議論とは違って、人類が他の動物とは異なるために持つ人間本性として捉えられる。一方で、人間を社会的存在ではなく孤立したものとして取り扱う古典派経済学は、人間社会の仕組みを解明するために、自然主義的論理によって根拠づけを行った。とくにマルサス

¹⁹ むしろスミスは「土地生産物のうち、使用と消費に適したものにかなりの手間が不可欠な部分の加工のために資本が使われなければ、こうした土地生産物は需要がないので、生産されない。自生のものであっても交換価値を持たず、社会の富を増やすことはまったくできない」(Smith, 1776, pp.360-361, 邦訳 370) というように、商品としての価値を得るために資本の活用の重要性を説く。商品以前の単なる有用物の獲得にも関心を示したポランニーとは力点が異なるのが明瞭である。

の議論は、人間が動物の一種であることに依拠し、人間と動物との共通点を見つけることで、動物の一種である人間が織りなす社会においても自然が観察されねばならないという論理によって正当化される。

交換性向は人間であれば持っているはずの要素であるとスミスが認識したことに対して、ポランニーは歴史的分析を用いて批判を行った。なぜならば、交換に過度に着目したことで経済学が進むべき道を誤り、社会性を除去した市場の学になったと認識したためである。

しかしよく考えてみると、スミスの交換性向は何人も社会的存在であるからこそ持つものであろう。交換は純粋に個人の行動ではなく、社会的存在として他者と交流することを意味するため、スミスが交換性向を人間の自然的本性と位置付けたことは、社会における人間という視角からすると必ずしも誤りとは言えない（梅沢，2009）²⁰。人間本性としての交換性向は社会的存在としての人間像を部分的ではあるが表現している。つまり、ポランニーは、社会的存在としての人間の根拠となりうるスミスの交換性向を否定しながら、一方で人間と経済を社会的領域に従属すること、つまり人間が社会的存在であることをスミスが理解していたと肯定している。交換性向を否定したのであれば、スミスの叙述から経済活動を行う人間を社会的存在として措定することは難しい。共感論への言及がないこともその足枷となっているであろう。

そのため、ポランニーは社会的存在としての人間像をスミスの叙述では全体的な直感として知覚したといえる。ポランニーの個々の議論を追ってはそのような大枠は見えてこない。むしろ、社会的な全体性から政治や経済を切り分けることで、人間社会の複雑性を見落としてしまうことに異を唱える準拠枠としてスミスを捉えるべきである。理論的な不徹底がみつけれられるもの（だからこそ）、社会の全体性とのバランスを取りながら経済を見据えた思想家としてポランニーはスミスを評価した。

おわりに

本稿ではポランニーによる古典派経済学批判とアダム・スミス受容を検討した。経済学の父とされるスミスの功績とりわけ社会と経済を結び付けて理解する態度を評価した一方で、後世の理論に影響を与えた人間像を批判した。その批判は、スミスの全体像をとらえたものではなかったかもしれないが、それを通してポランニーが示したかったのは人間を取り巻く環境を考慮して社会を考察する態度といえよう。

また古典派経済学については、賃金の鉄法則を生むことになった自然主義の取り込みが批判の中核であったことを見た。自由と自然が奇妙に結びつくことで生まれた教義が、貧困を発生させ、社会的存在としての人間の在り方を破壊していったことをポランニーは問題としていた。労働市場を生み、人間の生存をあやうくする経済学がポランニーの挑戦した課題であったのだ。

本稿を閉じるにあたり、これまでの分析から析出されるポランニーの経済学理解の特徴を示そう。ポランニーの経済学批判は当時の理論水準からすれば2つの点で奇妙である。まず『大転換』出版当時既に高い評価を得ていたケインズへの言及がないことが挙げられる。²¹ケインズが『一般理論』を上梓した

²⁰ 梅沢（2009）の指摘は主にマルクスのスミス批判の限界を議論するために示されたものであるが、ポランニーについても同様に議論できる。

²¹ ケインズ自体の名前はポランニーの著作中にも確認できるが、ピラミッドの建設がケインズ的な公共事業と考えられることなどのように、有意義な議論にはつながない。

1936年当時、ポランニーはロンドンを中心とした労働者教育協会の詩人教育講座の講師を務めており、『大転換』の執筆計画すら上がっていなかった。リー(2014)が指摘するように、ポランニーとケインズは20世紀に人類が経験した世界大戦の原因が金本位制にあるという認識を共有し、双方とも金本位制の廃止を主張した一方で、国際政治の場での協力・協調を求めるポランニーと国内経済の回復を優先事項とするケインズの態度は異なった。「南海の孤島を襲った伝染病」ほどの影響力があり、且つ結論的主張を異にするケインズ理論への評価をほとんど明らかにしないのは不自然といえよう。国際的視点で政治経済社会を眺めようとしたポランニーであれば、ケインズへの批判があってもよいはずである。

第2に、ミルやマーシャルといった当時の主流派経済学理論への批判もそれほど強くないことが挙げられる。マルクスへの言及はあえて避けたものと推察できるが、ミルに対して救貧法思想や国家と貨幣の結びつきを看過したという程度にとどまっている。経済学理論への批判を展開するならば、価値論が大きく転換したことへの議論があるべきであろう。また、経済学が社会科学の一領域であるにすぎないため、他の分野からの影響をうけるので、経済学の理論的帰結も一定の条件付きでしか正しいと判断できないとしたミルの社会哲学論は、ポランニーの経済学理解と高い親和性を持っているように思われる。他の分野への考慮なしに経済学が現実的な問題にアプローチすることはできないという主張は、本稿で明らかにしたスミスとポランニーが共有する社会と経済の関係そのものであろう。

このように、ポランニーの経済学理解は古典派理解と異なってやや偏りがある。『大転換』執筆以後、彼がどのように経済学を理解していったのかは、新たな課題である。とくに、マクロ経済学理論の発展や冷戦に対する理解などは、新資料の発掘などを含めて今後の課題となろう。

参考文献

- 梅沢直樹(2009)「原理体系における流通論の在り方をめぐって:スミス・ポランニーとの交錯を通して」『彦根論集』第277号、39-58頁。
- 笠井高人(2016)「カール・ポランニーにおける市場像と公正価格:『ベーシックニーズ』と『実質的経済』をめぐって」『経済学論叢』第68巻、第1号、pp.115-139。
- (2019)「カール・ポランニーの知的関心の一貫性:人間社会と貨幣における身分の本質的役割」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第70巻。
- 喜治都(2012)「経済学における『自然』概念の再解釈:ポリティカル・エコノミーから現代経済学へ」『論叢』玉川大学経営学部紀要、第19号、pp.31-50。
- 重本直利(2018)『『資本主義をマネジメント(制御)する』方法と社会共生学:カール・ポランニー「社会を経済に埋め込む」と「複合社会」像の検討から』重本直利ほか(編著)『社会共生学研究:いかに資本主義をマネジメント(制御)していくか』晃洋書房。
- 東條隆進(1995)「リカード経済学における<救貧法>の意義:『経済学及び課税の原理』の形成」『早稲田社会科学研究』第51号、1-25頁。
- (2009)「タウンゼントの『救貧法論』(GreyhoundsとGoatsの定理)とヴォルテラの『種間生存競争定理』」『早稲田社会科学総合研究』第10号第1号、1-15頁。
- 野原慎司(2013)『アダム・スミスの近代性の根源:市場はなぜ見出されたのか』京都大学出版。
- リー・サンベック(2014)「経済思想と平和:スミス、ポランニー、ケインズの平和構想」『Prime』No.37、21-33頁。
- 若森みどり(2011)『カール・ポランニー:市場社会・民主主義・人間の経済』NTT出版。
- Almdovar, António and Brandão, Maria de Fátima(2001)“On Building up a Market Society: Lessons from the Wealth of Nations and The Great Transformation” Clark, Charles and Rosicka, Janina (eds.) *Economic Transition in Historical Perspective: Lessons from the History of Economics*, Aldershot: Ashgate, pp. 43-62.
- Dale, Gareth(2010) Karl Polanyi: *The Limits of the Market*, Cambridge: Polity Press.
- (2017) *Karl Polanyi: A Life on the Left*, New York: Columbia University Press.
- Holmes, Christopher(2014)“Problems and opportunities in Polanyian analysis today” *Economy and Society*, Vol. 41, Issue 3, pp. 464-484.

- Özveren, Eyüp (2010) "Groundwork for an Institutional Economics Approach to 'Transition': Smith and Polanyi Reconsidered", *Economic Transition in Historical Perspective: Lessons from the History of Economics*, Aldershot: Ashgate, pp.63-78.
- Polanyi, Karl (1944) *The Great Transformation*, Boston: Beacon Press. (野口建彦・栖原学訳、『大転換』東洋経済新報社, 2009年。)
- (1977) *Livelihood of Man*, New York: Academic Press. (玉野井芳郎・栗本慎一郎訳「社会における経済の位置」『人間の経済Ⅰ・Ⅱ』岩波書店, 1980年。)
- Polanyi, Karl et al. (1957) "The Place of Economies in Societies" Dalton, George (ed.) *Primitive, Archaic, and Modern Economics: Essays of Karl Polanyi*, Anchor Books, 1968: New York, pp. 116-138. (玉野井芳郎・栗本慎一郎訳「社会における経済の位置」『人間の経済Ⅱ』岩波書店, 1980年, 522-555頁。)
- Rodrik, Dani (2011) *The Globalization Paradox: Democracy and the Future of the World Economy*, Oxford: Oxford University Press. (柴山圭太・大川良文訳『グローバリゼーション・パラドックス』白水社, 2014年)
- Rogan, Tim (2017) *The Moral Economists*, Princeton: Princeton University Press.
- Smith, Adam (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nation*, Campbell, R.H. and A.S. Skinner (eds.) , Oxford University Press.
- Watson, Matthew (2014) "The Great Transformation and Progressive Possibilities: The Political Limits of Polanyi's Marxian History of Economic Ideas" *Economy and Society*, Vol. 3, no. 4, pp. 1-23.